

第I部

伝えていきたい戦争の記憶

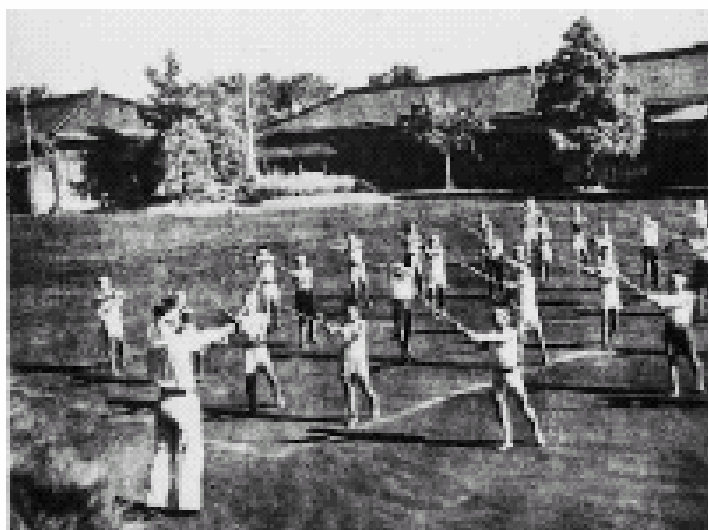


写真11 1941(昭和16)年 体操の授業 綾瀬村国民学校校庭にて

小学校低学年が見た太平洋戦争

高橋 スミ子

終戦前の3年間、私は国民学校1、2、3年でした。家の近くに飛行場があり畑の一部は滑走路です。日本は武器の資源不足で各家庭から家具類を供出、国民は配給制で新入生でも靴はクラス2人くらい、他の者は夏は草履、冬は下駄で片道1時間の通学です。農家なのに作物は供出で不足、ご飯も米とイモ半々、それもイモに米粒がついているものになり、学校から帰ると畑の手伝い、軍のため、春は山で松ノ木の樹脂取り（エンジンの油にする）夏は桑ノ木の皮むき（兵服を作る）、秋冬は木枯らしの吹く中、麻袋1枚づつ配られ、茶の災、榕の災を拾って（エンジンの油）歩くのです。勉強も遊びもない日々でした。

家のお蔵の2階は軍人が占拠し、威張っていました。毎朝庭に、兵隊を30人くらい並べ藁を鎌刀^(注1)で切ってきて、お尻をバンバン叩くのです。私は母屋の柱の陰から見「かわいそうだね、お兄ちゃん達の母ちゃんは知らないんだね」と母「知らなくていい、知らなくていい」と怒った顔です。軍人は白米ご飯と缶詰を食べ、兵隊はいつも腹ペコです。家の少ししかない食物を盗んでも母は16、17歳の食べ盛りと許していました。

警戒警報が鳴ると飛行場から兵隊が逃げてきて、家の防空ごうにわれ先に入って、反対に年寄りと女、子供で滑走路に置き放しの飛行機に木の枝や草をかぶせてアメリカのB29^(注2)に見えないようにする。毎日この繰り返しでした。

4年以上は本校へ学徒動員、3年以下は近

くの神社へ通うのですが、9時頃着いたとたん、サイレンが鳴り先生「帰れ」の号令、7人くらいで急いで帰る途中、B29が来てしまい、たんばの真ん中で畦道に一列に伏して震えていると、体の脇を機銃掃射^(注3)され泣くことも出来ず、B29が去るまで草を握り締めて息を殺して待つのです。B29が去った後、起き上がり泣きながら今さっき生命を狙われた弾空を拾い、縄でしばって持ち帰り供出です。資源不足でオンボロな大砲で打っても敵機には届かず、機能の良いアメリカのB29は高度から命中させると、まるでちようちよが舞っているように、上空でひらひらと飛んでいるのです。私達は地団駄踏んで悔しがりました。

とうとうここからも特攻機が飛び立つようになりましたが、その半分は飛行場の上を旋回して私達に別れを告げて間もなく畑に墜落するのです。家の戸を外して担架にし、隊士を運んで来るのですが、厚地の帽子も服も爆風で破け顔や手に破片と土が突き刺さっています。母と2人で抜き取り、手拭いでふいてやり虫の息の隊士の顔を母の膝にのせ口を開けて「しっかり、薬もなくてごめん」と家にある仁丹^(注4)を3粒くらいづつ入れてやり、送り出しますが、隊に着く時は息絶えていました。母「19、20歳まで育ててもらってつらい」と泣きました。17歳で出征した長男を思ったのでしょうか。（戦後数年経って、息子の亡くなった所の土を下さいと親の方々が訪ねて来ました。）長男は出征する時「村中が疎開してもここに踏みとどまって村を守るように」と言いまし

(注1) 鎌刀——腰に挿す、つばのない短刀。

(注2) B29——第二次大戦末期に活躍したアメリカ、ボーイング社製の大型長距離爆撃機。

(注3) 機銃掃射——機銃で敵を一掃するように倒し払うこと。

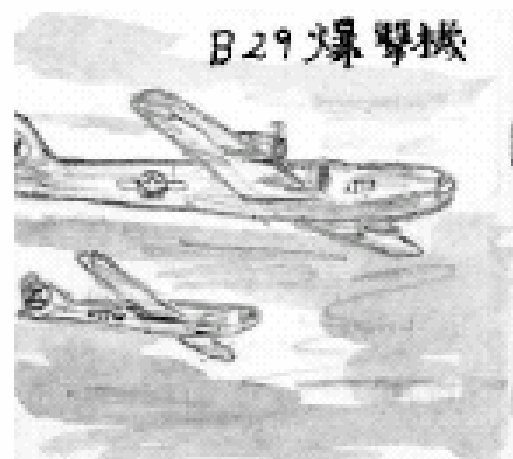
た。支那事変^{（注4）}で父が亡くなった時、12歳だった長兄は大黒柱となり、母を助け弟妹5人を見てきたので、長兄の言葉通り疎開しませんでした。村中ほとんど疎開し、生活の音が聞こえず静まり返った中、軍人と兵隊との暮らし、泣かなくてもいつも涙が出ていました。いよいよイモも供出できなくなり、コーンを炊き米粒をまぶしてにぎり、1日1人1個回くてとうとう私は赤痢にかかり、病院は軍人優先で後回しにされ高熱と下痢が一週間続き、髪も全部抜け落ち死ぬ直前母の必死の手当で生き返りました。

8月15日、日本は負け「アメリカ兵は鬼だ、女、子供は取って喰われる逃げろ」とデマが流れ、荷車やリヤカーを引いて東へ西へ逃げ惑う人々で県道はパニックです。軍人、兵隊も去り、夜蛍灯の黒い布を外し食べ物もなかったけど、手足を伸ばし家族で泣き笑いしました。

2日後から、村人も帰ってきましたが、長兄は8月過ぎても帰らず、毎夕方国鉄の線路に母は立って待ちました。9月のある日曜日、昼間立っていると線路に煙気楼^{（注5）}が立ち、その向こうに人影がぼんやりうつりました。母「兄ちゃんだ」とへなへなと線路に座り込み両手で顔をおおいました。頼りだった長兄が旧制中学5年で志願兵として出征してからどんなに心配し、待っていたことでしょう。

2学期が始まって毎日教科書を墨で塗りつぶす。4年になっても文房具についている絵によって先生が取り上げ校舎の片隅に埋めます。アメリカにびりびりしていました。滑走路だった畑を作物を作る普通の畑に戻すのに3年以上かかりました。戦争は勝っても負けても、千の一つ、万の一つも良い事

はありません。大人も子供も国土も破壊され元通りに復興するにはどれだけの年月、財源が必要か、また、人命は復興できないのです。世界各国のリーダーはここがわからないようです。だって、今もおろかな戦争をしているではありませんか。



(注4) 支那事変……日中戦争のこと。1937(昭和12)年盧溝橋事件をきっかけに起こった日本と中国の全面戦争。日本軍は政府の不逞大方針を無視して戦火を全中国に拡大した。

記憶に残された戦争体験

山本 二美人

昭和19年、私が小学校3年生の時、母と2人で日の丸の旗を振りながら、村のお伊勢様参りに行った事が思い出されます。空襲警報のサイレンが鳴ると、学校の裏山に大きな防空ごうがあり、そこへ1日に3回くらい逃げ込んだ事や、頭上で日本の戦闘機がアメリカのB29に攻撃されて真っ黒い煙を出しながら墜落して行ったのを2回見ました。

蒸かしたサツマ芋を食べながら、夕涼みの時、山の向こうに、福岡の刀洗という飛行場があり、そこへB29が爆弾を落とし、

真っ赤に夜空が焼けて見えました。学校から帰っても何にもおやつがなく、畑の隅にグミの木があり、その実を取って食べたり、クワの実も近所の子供達と取り、みんなで食べた事が今なつかしい思い出となっています。

昭和20年8月15日、暑い暑い夏の日でした。ラジオから聞こえた日本の無条件降伏の放送に、大人たちが涙を流しながら、汗臭いタオルで顔をふいていた。

苦しい、つらい戦争の記憶として私の脳裏に残っています。



静かな山里にも戦火の響き

平本 芳人

私は昭和10年に長野県の山村で生まれ、小学校に入ったその年の12月8日にアメリカ・イギリスとの大東亜戦争^(註1)が始まりました。小学校の1年生・2年生の間は、本校が4キロ程離れていましたので、昔の寺を利用した分校でした。

入学の時は新しい服とランドセルを買ってもらいましたが、靴などはクジを引いて当たった人が3人ぐらいでした。

子供心にも不安を感じ、食べ物は菓子とか肉はなく、野山の木の実を季節ごとに採って食べたものです。

冬になると学校では、お母さん方が交代で、毎日味噌汁をお昼に出してくれました。普通は野菜の汁でしたが、鳥や山鬼^{やまおに}を取っている猟師^{りやうし}さんの当番の日には、その取った肉などが入っているので本当に美味しかった事を覚えています。砂糖もなく、たまに配給になる黒砂糖^{くろさとう}の塊^{かたまり}を使ってお餅^{もち}などを作って食べるのが楽しみでした。それでも都会とは異なって空襲^{くうしゅう}などはなく、食べ物での心配はありませんでした。カボチャやサツマ芋、大根などの多い食事で、今のよう太った人はあまりいませんでした。

3年生になり、毎日4キロの道を歩いて本校に通うようになると、勉強よりも飛行場を作るための石運びや、川辺を切り開いて畑をつくりサツマ芋を作る毎日でした。先生も学校では生徒に、将来は国のために兵隊に行くための心構え^{こころがまえ}を教えていました。またこの頃になると、都会から戦火を逃れて学童疎開^{がくどうそかい}の多くの子供達が村の寺に移住し、学校に行くようになり父母と別れ、食

べ物も少なく淋しい思いをしたと思います。

また、校庭には防空ごうを作り、その上にカボチャ等を作りました。爆弾が落ちたらひとたまりもない様な丸太に土を載せただけのものでした。

戦争が終わる頃には、学校での教科書も紙もなく、新聞紙の1ページくらいの紙を折って教科書代わりでした。山の中であつたので、戦争で死ぬ心配はありませんでしたが、若い青年達が多く亡くなりました。当時の報道は、真実が報道されず、偽り報道がされていました。

昭和20年8月15日終戦の時は、小学校4年生で、当日は暑い暑い日で昼頃ラジオから天皇陛下の声を初めて聞きましたが、子供には意味があまりわかりませんでした。人々は戦争に負けたんだと言っておりました。

戦後アメリカ兵が進駐してからは、学校での教育は民主主義の教育にかわり、スポーツは野球、水泳、若い人達はダンスをするようになり、自由で明るく、生き生きとしてきました。

本当に平和である事の大切さを感じました。

(註1) 大東亜戦争……太平洋戦争の日本側での自らの公称。

子供達の夢を奪った戦争体験

酒井 かつ子

第二次世界大戦。当時大東亜戦争とも言っておりました。昭和16年12月8日、ハワイ真珠湾攻撃を機に、世界大戦が勃発したのです。当時小学校1年、国民学校でした。6歳の私達にはよく分かりませんでした。

しかし世の中は騒然とし、物資も配給制度となり、各クラスに運動靴も3足くらいしか配られず、靴のない子は「はだし」で学校に行きました。教科書も「サクラ、サクラ」から、「ススメ、ススメ、ハイタイススメ」と変わり、本もなく、教科書はガリ版ずりの粗末な物でした。世の中は戦争一色、「欲しがりません、勝つまでは」と、それを守れない人は恐ろしい憲兵(註1)に連れて行かれます。

3年生になると今まで勝利といていたラジオの放送も、空襲の放送に変わってきました。敵、アメリカの飛行機が飛んできて爆弾を落として行きます。学校の窓ガラスはすべてテープが貼られ、家は電球に黒い布がかぶされ、私達はいつでも逃げられるように、防空ずきを枕もとに置き、服を着たまま寝ました。

4年生・5年生の時は東京は空襲が激しくなり、学童疎開(註2)といって子供達が田舎に行って生活することです。今の天皇陛下も栃木県に行ったそうです。毎夜けたたましいサイレンに起こされ、アメリカのB29が飛んできて爆弾を落として行き、東京も横浜も火の海です。年寄りや女・子供で作った防空ごうで朝まで震えていたこともあります。食べるものもなくそれはそれは大変でした。

昭和20年3月10日、東京は大空襲に遭い、続いて夏に広島・長崎と原爆が投下されました。当時、ビカドンと言いました。その何日か後、8月15日、ラジオで天皇陛下の放送があり、戦争終結したのです。

厚木基地にマッカーサーが来て、日本は軍国主義(註2)から民主主義の国に変わりました。今の平和な、物の豊かな現在があるのです。

私は、絶対に戦争では幸せになれないことを知りました。

(註1) 憲兵——旧陸軍では、陸軍大臣の管轄に属し、主に軍事警察を司り、行政警察、地方警察を兼ねた。

(註2) 軍国主義——国の政治経済や法律、教育などの政策・組織を戦争のために準備し、戦争で国の威力を高めようとする立場。

戦争と集団疎開

小森 正男

第二次世界大戦の戦況が悪化する昭和19年に入って、マリアナ諸島のサイパン島が陥落し、いよいよ米軍による日本国内の空襲が可能になった事を受けて、政府は都会に住んでいる人を対象に疎開を奨励し、縁故のある方は縁故疎開を推進しましたが、田舎には縁故もなく、疎開するところがない小学生を対象に集団疎開をする事になったのでした。

私の家は新潟に縁故がありましたが、事情があって縁故疎開ができなかったので、両親は集団疎開を選びましたので、疎開先は箱根の強羅駅前にある吉浜旅館でした。

私が5年生、弟が3年生でした。昭和19年7月末より集団疎開が始まりましたが、不慣れのため色々と問題がありましたが、先生を中心に乗り越えてゆきました。昭和20年3月末、父親が召集令状を受けたので、1日親子で過ごし、翌日強羅の駅にて「バンザイ」を三唱して戦地へ送ることができました。

昭和20年5月29日に横浜大空襲があって、我が家も焼失しました。母親は妹を連れて避難したとの事でした。強羅に私達兄弟2人のところに来て、住む家も焼けてないので、新潟の実家に行こうと迎えに来たとの事でした。

母親と兄弟4人で実家に行きましたが、巻町の駅の近くに1軒家を借りて生活するようになりました。

昭和20年8月15日終戦、子供心にも良かったと思った記憶があります。昭和20年12月下旬、今度は伯母さんが親子4人で満州より引揚げてきたのですが、やはり実家には泊まれず、私達の借家に同居することになり、7人の大家族で生活するようになりました。

翌、昭和21年秋、父親戦死との公報を受けて、私達母子はみんなで力をあわせて生き抜いてゆこうと誓ったのでした。



遠州灘夜間の艦砲射撃の恐怖

佐藤 好明

昭和15年、アジアで初めての東京オリンピックが開催される予定だったのですが、軍事色が強くなり、オリンピックは中止されたそうです。当時私は、小学校1年生でした。かすかな記憶として覚えています。

翌年の昭和16年12月8日の朝、ラジオの臨時ニュースで、「帝国陸海軍は、今8日未明西太平洋において、米英軍と戦闘状態に入れり」という、アナウンサーの声は今もって頭に残っています。子供心に、いよいよアメリカとイギリスの大国と第二次世界大戦（当時は大東亜戦争）が始まったのだと、緊張した事を覚えており、私は満7歳で国民学校2年生の時でした。当時は子供の好きなお菓子類は一切店からは無くなり、時々学校で配給の菓子ともいえない米糰が入った様なパンらしき物が配給された事を覚えています。

当時は、何年か前の古本の中にチョコレートとか、バナナの絵を見て、どんな味がする物かなあ！一度食べて見たいと言うのが本音でした。

昭和19年の6月以降からは、日本の各地で空襲が激しくなり、毎日学校の登下校には、必ず防空頭巾を持参して、空襲をうけたらすぐ頭にかぶり、防空ごうに避難しました。昭和20年に入ってまもなく、私達の国民学校が兵隊の兵舎に使用のため、教室を空ける作業に入った日に、突如敵のグラマン艦載機(注1)の機銃掃射を受け、教室の黒板に機銃の弾が当たり、直径4センチくらいの穴が7ヵ所くらいあいていました。今もって機銃掃射の恐ろしさが忘れられません。

昭和20年6月17日の夜半から、浜松市にB29の焼夷弾攻撃と、艦砲射撃を受け、浜松市の大半を焼失し、2,500名近い死者を出しました。

20年も7月頃、私達の村にも兵隊さんが駐屯し、塹壕(注2)を掘っていました。お腹がすき、家に干してあった生芋をそっと持って行った所を上官に見つかり、私達の目の前で殴る・蹴るの制裁を加える姿を見て、子供心になぜ日本の兵隊さんをこれほどまでにいじめるのかと、上官を憎く思いました。軍服は破れ、軍靴ではなく、わら草履を履いての作業でした。村の各家に手榴弾(注3)が配られ、「敵が上陸した時は身体ごと体当りの攻撃をする様に」村長から話された事が忘れられません。子供心に恐ろしく、どこか山の中へ疎開したいと心の中で思いました。

戦争をなくし平和を願うために、次世代の方々に真の人道教育を、世界の若い人たちと共有して下さることを希望します。

(注1) グラマン艦載機……軍艦に対抗するために開発された米海軍の艦上戦闘機。

(注2) 塹壕……野戦において歩兵の守備線に沿って作る体が隠れるくらいの防衛施設。

(注3) 手榴弾……手で投げることの出来る小型の爆弾。

終戦の思い出

中西 トキエ

めぐりくる8月15日を迎えると、青空と草のにおいが鼻をつき、あのいまわしい終戦の日の出来事がよみがえる。

暑いあの日、セミの鳴き声に誘われる様に私は近所の友達と近くの川に水浴びに出かけた。昼近くになり、なぜか私はトイレに行きたくなり、急いで家に戻り、用をすませた。我が家には近所の大人が集まり、ラジオ放送を聞いていた。その異様な様子に、子供心にもなんだろうと思い、家の中を覗くと母が、「戦争に負けたんだよ」と力なくつぶやいた。どうしようと頭の中がグルグル回ったのを覚えている。

また川にもどり、友達に言っても誰も本気になる人はいなかった。その日の夜一番印象に残っているのは、今まで部屋の電燈にはみな黒い布を被せ、明かりが外に漏れない様にしていた。明りが漏れるとB29の標的になるからだ。その布をはずした時の電燈のまぶしかった事を今もはっきり覚えている。戦争中は、学校も戦争一色であまり授業もなく、体育館などは床板をはがし、軍事工場と化していた。

当時小学校6年生であった私達も農家の手伝いをやらされ、自分の家も農家でありながら、戦争に行って働き手のいない家庭の手伝いをさせられた。歌といえば、「兵隊さんよありがとう」など、軍国主義を賛美する歌ばかりだった。終戦になり、授業が始まっても教科書は紙不足のためザラ紙で、消しゴムを使うと破けてしまう悪い紙であった。そのせいか、今でも白い紙を見ると捨てられず、広告の裏が白いものをもって

置きメモ帳にする。私の机の上には、そのような白い紙が山と積まれている。物不足に悩まされた少女時代だったが、心はいつも青空の様だった。少ない食べ物を家族で分け合い、両親の下で生きて来られた事はその後の人生にも大きく影響しているように思える。

どんな理由にせよ、戦争は絶対やってはいけない。人が人を殺す、これほど罪深い行為はないと思う。戦争という名の下の殺人行為だ。

人は幸せに暮せる権利がある。

その権利を手に入れるために何をなすべきか1人1人が真剣に考えて生きていきたい。目を世界に向ければ、まだまだ戦争が続いている。そして幼い子供が泣き叫ぶ声を聞くにつけ、胸が締め付けられる。決して戦争をやってはいけない。この一言を語り続けて生きていきます。

第二次世界大戦が始まったのは、私共が小学校の6年生の12月8日でした。当時私は、山梨に住んでいました。毎月8日には学校で朝礼が終わったら神社に参拝して武運長久を祈念して、それから授業に入ったのです。

勤労奉仕で出征兵士の家の畑の草取りや養蚕の手伝いによく行きました。

村の農家の現金収入は生糸をとるお蚕さんでした。勉強以外に竹槍の訓練とか、火を消すためのバケツリレーとかよくやっていました。大学生の男子は、学徒動員で兵隊になり、女子は挺身隊^(註1)で軍事工場に行っていたのです。

農家でもお米はみんな供出してしまい、麦の入ったご飯にお芋とか大根を入れて食べました。

私の家でも上の兄は召集令状が来て兵隊に行き、陸軍に入隊し内地で高射砲を撃っていたのですが、B29は高い所を飛んでいるので砲弾が届かなかったそうです。

下の兄は学校へ行っていましたが特別幹部候補生^(註2)で兵隊に行きました。

叔父は18歳で志願して海軍の軍人になり、昭和18年8月にソロモン沖で船ごと沈んでしまいました。37歳でした。

同級生も志願して飛行兵になり、亡くなった人もいました。

もう二度と戦争の悲劇を繰り返さない、平和な世界を毎日祈っております。

(註1) 女子挺身隊……太平洋戦争下の女子の勤労動員組織。満12歳以上40歳未満の未婚女子により居住地及び戦場で構成された。1年間工場や農村で勤労奉仕をした。

(註2) 特別幹部候補生……特別中幹部候補生制度による。1944(昭和19)年に大学や高等専門学校に在学者を対象に、兵科及び管理職の資格を短期養成する制度。